



「からだの百科」

A.M. クック編・森 亘監

PT・OT に必要な一般医学常識のために

これはもともと家庭医学書としてつくられたものであるが家庭医学書としては大変高級だし、出来ばえも大変見事である。このように臨床医学の基本を踏まえた、しかも分かりやすい書物は日本ではちょっとお目にかかれなれないと思われる。

私はとくに PT や OT の諸君に推薦したい。もちろんリハビリテーション医学固有の領域については入口の、またその入口の知識しか扱われていないが、PT、OT がこの程度の一般医学常識を是非持っていてもらいたいという意味では大変有益な本であるといっていいただろう。PT や OT はリハビリテーションの理念を1日も忘れたことはないであろうし、運動機能の評価と訓練についてはいうまでもなく専門家である。ところが、いわばその中間——心と体を持ったまごとの人間についての知識は必ずしも十分ではない場合が多い。リハビリテーションの目標は不自由な手足ではなく、不自由な手足を持った人間であるし、その人間というのは抽象的なし

哲学的な人間ではなく生物的な（そして精神的な）人間であるはずである。ところが PT や OT の人達の知識はまるごとの人間全体からするときわめて狭い、特殊な部分に限局しがちなのである。それでは具体的な人間としての障害者のニーズを十分に受け止められないであろう。もちろん人間全体については他の専門家の助力をアテにしなければならないが、その助力をうるためにも基本的な一定度の一般医学的知識を持っていることが望ましいのである。

家庭医学書とはいってもこれを素人が読み通すことは必ずしも容易でないと思われるが、PT、OT ならたやすく理解できるはずで、この程度の医学常識を持った PT、OT の世話になっておれば障害者の安心感も大きいであろうと思われるのである。たんに小手先の職人であることに満足しないで障害者の人間に関わろうとするならこれは手頃な座右の一冊であるといっていいであろう。

(四六倍判 (269 mm×192 mm), 720 頁, ¥ 4,800,

岩波書店, 1983)

(国立療養所東京病院名誉院長 砂原 茂一)

《FORUM フォーラム ふぉーらむ》

初めての給料日

浜 岸 利 夫

初めての給料日、受けとった給料の金額を見て、同じ新入職員と声をあわせて「どうして、こんなに少ないのだ!」と顔色を変えて話し合った。一般にセラピストの給与は低いと言われがちであるが、自分の職業として選び、生まれて初めてもらう給料であるから、かなり期待していたのであった。それが予想に反して少なかったから話がたいへんだ。でも、すぐ後で理由が明らかになった。なぜかと言えば、会計が15日で締切りであるから、当然半月分なのである。それを聞いて思わず胸を撫で下ろした次第であった。

しかしながら、よく考えてみれば、勤務を始めてわずか1か月ぐら

いしか働いていない職員に対して、病院がどうして1人前の職員と同じだけの給料を払ってくれようか。理学療法士として勤めたから、1人前の給料をもらおうという気持ち自体が、浅ましく思われた。まして私などは、1人前の理学療法士には、程遠い存在である。1人前の給料をもらおうなんてまだまだ早すぎる。1か月ぐらいいでは、学生の時と比べて治療者としての何らの成長を見られないであろう。

しかし、一旦勤め始めるとどうしても学生と違ってくるはずである。担当患者に対する責任、スタッフおよび他の部門との協調性、病院の組織内における立場……etc. 数え上

げれば際限がないように思えてくる。今まで考えもしなかったことが自分にふりかかってくる。セラピストとして、それだけ責任を負わなければいけないのである。そして、自分の持つ知識・技術を維持しながら、なおかつ向上を目指さなければならない。それが、1人前の給料をもらっている半人前のセラピストとしての義務なのかもしれない。

このことを全国の新人セラピスト諸氏に心がけておいてもらいたいのである。そろそろ懐がさびしくなってきた。給料日が待たしいこの頃である。

(石川整肢学園 理学療法士)